

## 『赤の持ち手』

株式会社銀座マギー ポップバッグ 銀座店

バダシャウィ サラ

気持ちのいい4月末の夕方。外では春らしい気候を楽しんでいる人が幸せそうに歩いている。一人でお店に立っている私。お掃除していたら明るい声で挨拶してくれる方がいた。とても綺麗な40代くらいの方だった。巻いている髪の毛を高いポニーテールでまとめて、黒のワンピースを着て、赤いバッグを持っていた。私も挨拶をして、少しお話をした。「今日はとても天気がいいのに予定がなかったから少しでも出かけようと思って銀座に来ちゃった」と笑いながらおっしゃっていた。ブランドのコンセプトを説明しながら話していたら、赤が好きなことが分かった。

確かにバッグだけでなく、靴もネイルもリップも赤だった。話の流れで早速バッグを作ってみることに。バッグは赤以外で作りたいけれど必ず赤の部分を入れたい！とおっしゃっていたので、赤の持ち手を付けてみたらとても喜んでくれた。

そこからお会計をして、お包みをしているともう一人お客様がご来店。同じく40代くらいの上品な方だった。この時間は私しかお店にいないので接客に入ろうと思っていたら、黒のワンピースのお客様が先にこのバッグの説明を始めた。

その方も自分のバッグを作ってみることにになり、好みを聞きながら作っていくと黒のレザーに赤の持ち手のバッグができた。赤の持ち手かぶりに驚く私。

そこで二人目のお客様が話してくれた。赤を身に付けると良縁が来ると、子供の頃お婆様に教えてもらったことがあるそうだ。「だから毎日小さいものでも赤いものを必ず身に付けるんです」と赤のブレスレットを見せながら話してくれた。

その話に感動した一人目のお客様が袋から自分のバッグを出して、「私にも良縁が来るといいなあ」と、赤の持ち手を指しながら笑っていた。

お会計をしてお包みしながら三人で楽しくお話した。気付けば一人目のお客様が来てから一時間経つという話をしたら、「今日は本当にたまたま来ただけなのに凄く楽しかった」と笑顔で言ってくれた。嬉しい気持ちで二人を見送り。その日は閉店。

春も夏も終わって、10月に入った。気持ちのいい秋晴れの午後にお店のバッグを持った二人組がご来店。「お久しぶりです」と明るく挨拶してくれた時に思い出した。

あの時の赤の持ち手のバッグのお客様達だった。

あの日お見送りした後、二人で駅に向かいながら話していたらご近所ということがわかり、帰りの電車で楽しく話しながら、連絡先まで交換したのだという。

なんと、その日から少なくとも3回は二人でランチやお茶をしたそうだ。

赤の持ち手のおかげで本当に良縁が来たと一人目のお客様が笑いながら言っていた。

この仕事はただ接客して買ってもらうだけじゃないかと、楽しそうな二人をお見送りしながら私は強く感じた。

仕事に関してはもちろんだが、この狭い空間で人間として毎日勉強になることがたくさんある。素敵な話を聞かせてもらったり、相談に乗ったり、乗ってもらったり。

そして今回は、気持ちのいい4月の夕方に一人でお店に立っていた私の目の前で、素敵な友情関係が生まれたのだった。

ちなみに今日の二人はおそろいのキーケースを買ってくださった。その色はもちろん赤だった。